愛国学園大学人間文化研究紀要　第17号　28～36頁　2015年３月

〔論文〕

『西東詩集』：「ハーフィズの巻」について（Ⅱ）

鈴　木　邦　武

「ハーフィズの巻」の7番目の詩「まねび(Nachbildung)」については、ゲーテの日記で1814年12月7日の欄に「ハーフィズとまねび（Hafis und Nachbildung)」とあるので、この日に制作されたものと思われる。「ヴィースバーデン目次表」では15番目に「押韻のたくみ（Kunstreime)」として載せられている。

まねび

あなたの押韻の仕方に沿っていることを私は望みます
繰り返しも厭いません
先ず意味を、それから言葉を見つけます
誰よりも恵まれたあなたが出来るように
特別な意味を生み出すものでなければ
二度とどんな響きも響かせません

というのは一瞬の火花でも、炎となって激しく舞い上がり
自ら風を起こし、自らの風に煽られて燃え上がれば
帝都をも燃え尽きさせることが出来るほどであったように、
あなた自身からは永遠の灼熱を伴って絡みつくものがあり
ードイツ人の心を改めて励ましてくれるのです

勿論割り当てられたリズムにも魅力はあります
才能はそれを喜びもします
しかしそれらはなんと早く色あせてしまうことでしょう
血も心もないうつろな仮面なのですから
精神でさえも、新たなものを求めて
あの死んだ形式を終わらせない限りは
喜ばしいいものとはなりません[1)]

「まねび」というタイトルが示すようにこの詩もハーフィズを意識した作品である。ハマー＝プルクシュタルは『ハーフィズ詩集』の序文の中でハーフィズの用いた詩形について紹介している。ここに収められているおよそ700の詩のうち、576がガザル、マスナヴィーが7、カスィーダが2、モカタアートが44、ルバーイーが72、タハミスが1つであるとしている。[2)]『ハーフィズ詩集』の目次で調べてみると、ガザルは577あり、マスナ

ヴィーは4で、それに続く〈Meganiname (das Buch des Sängers)〉と〈Sakiname (das Buch der Schenken)〉を含めても6編で7ではない、次にカスィーダが2編、1編のタハミスがあってその後にルバーイーが72編、最後に断片的な詩編であるモカタアートが44編編纂されている。

ガザルは最初のバイト(対句、1行)を構成するミスラ(半句)が相互に韻を踏んで、その韻がバイト毎に繰り返されていくものである。

マスナヴィーはバイト中のミスラ同士は韻を踏むが、バイトとしては韻を踏むことはない。純粋にペルシア起源のものとされ、史詩、英雄詩、ロマンス詩、神秘主義詩等に用いられ、長さに制限はなく、数万句に達するものもある。ペルシア詩の代表的な詩編、フィルドウスィーの『王書』やサーディーの『果樹園』などでもこの詩形を用いている。

カスィーダの押韻形式はガザルと同じ形式である、と言うより、ガザルはカスィーダの導入部が分離・独立したものといわれていて、長さも5バイトから15バイト程度とされているが、カスィーダの方はもっと長くなる。

ルバーイーはミスラ4句から成り第1、第2、第4のミスラの脚韻が互いに押韻し、第3のミスラは押韻してもしなくてもよいことになっている。

ガザルの押韻に似せた詩形として「ズライカの巻」の最後の詩「百もの形の中に…」が挙げられる。アッラーには百の呼び名があって、信徒たちは自分たちの神を讃美するとき、その時、その時に応じて様々な呼び名でアッラーを称えたといわれているが、それに倣って詩人は愛する人を称えるのに様々な呼び名で呼びかける。そしてこの詩の中で2行毎に行末に〈dich〉を置くことでガザルに倣った詩の形式を取っている。

In tausend Formen magst du dich verstecken,
Doch, Allerliebste, gleich erkenn' ich dich
Du magst mit Zauberschleyern dich bedecken,
Allgegenwärtige, gleich erkenn' ich dich.

An der Cypresse reinstem, jungem Streben,
Allschöngewachsne, gleich erkenn' ich dich,
In des Canales reinem Wellenleben,
Allschmeichelhafte, wohl erkenn' ich dich.

Wenn steigend sich der Wasserstrahl entfaltet,
Allspielende, wie froh erkenn' ich dich.
Wenn Wolke sich gestaltend umgestaltet,
Allmannigfaltige, dort erkenn' ich dich.

An des geblümten Schleyers Wiesenteppich,
Allbuntbesternte, schön erkenn' ich dich.
Und greift umher ein tausendarmger Eppich,

O! Allumklammernde, da kenn' ich dich.

Wenn am Gebirg der Morgen sich entzündet
Gleich, Allerheiternde, begrüß' ich dich,
Dann über mir der Himmel rein sich ründet,
Allherzerweiternde, dann athm' ich dich.

Was ich mit äußerm Sinn, mit innerm kenne,
Du Allbelehrende, kenn' ich durch dich.
Und wenn ich Allahs Namenhundert nenne,
Mit jedem klingt ein Name nach für dich.

(百もの形の中に,あなたが姿を隠しても
本当にいとしい人よ、わたしはすぐにあなたの姿を認めます
あなたが魔法のヴェールに姿を隠しても
いたるところに偏在する人よ、わたしはすぐにあなたの姿を認めます

糸杉の、いとも清らな若きのびゆく力の中に
本当に美しくなられた人よ、わたしはすぐにあなたの姿を認めます
水路の清らかな波のうねりの中に
本当に愛らしい人よ、わたしははっきりとあなたの姿を認めます

噴水が吹き上げて、飛び散るとき
いとも軽やかに動く人よ、わたしはなんと嬉しい気持であなたの姿を認めることか
雲が形を造りつつ、変形してゆくとき
本当に多様な人よ、わたしはそこにあなたの姿を認めるのです

花模様のヴェールで覆われた草原の絨毯に
本当に色鮮やかにきらめく人よ、わたしは美しいあなたの姿を認めるのです
それから沢山の腕持つ蔦があたりに蔓を伸ばすとき
おお、すべてにからみつく人よ、わたしはそこにあなたの姿を認めるのです

山並の端に朝の光が燃え出ずるとき
すべてを晴れやかにする人よ、わたしはすぐにあなたの姿を認めるのです
それから、わたしの頭上で天が円形をつくるとき
本当にこころを広める人よ、わたしはそのときあなたを呼吸するのです

わたしが外的感覚で知るものも、内的感覚で知るものも、
あなた、すべてを教える人よ、わたしはあなたを通して知るのです
そして、わたしがアッラーの百の名を呼ぶときも
そのひとつひとつと共に、ただひとつあなたの名が反響してくるのです)[3]

この詩と同じように2行目毎の末尾に同じ語を用いてガザルの形式を取った詩として、1815年10月10日にハイデルベルクからの帰

途マイニンゲンで作られたとされる「1811年産のワイン」を讃美する詩がある。1811年産のライン河地方のワインは殊更上出来であったらしく非常に珍重された。ことにゲーテはこのワインを好んだようでフランクフルトの友人ヴィレマーは何度かヴァイマルのゲーテの許に送ってもいて、ゲーテもそれに感謝している。その11年もののワイン〈der Eilfer〉を讃美したものである。

WO MAN MIR GUTS erzeigt überall
'S ist eine Flasche Eilfer,
Am Rhein, am Mayn und Necker
Man bringt lächelnd Eilfer
Hört man doch auch wohlthätige Nahmen
Wiederholt wie: Eilfer
Friedrich den zweyten zum Beyspiel
Als beherrschenden Eilfer
Kannt wird noch immer genannt
Als anregender Eilfer
Mehrere Nahmen in der Stille
Nenn ich beym Eilfer

(人々がわたしに好意を示してくれるところ
至るところに
1本の11年ものがある
ラインのもとで、マインで、ネッカーで
微笑みつつ人々は11年ものを提供してくれる
慈善に富んだ名前が11年もののように
繰り返されるのを聞いてみたまえ
例えば支配する11年ものといえば
フリードリヒ2世
カントは刺戟する11年ものとして
依然としてその名があげられよう
幾人かの名をわたしはそっと
11年ものを味わいつつあげる)[4]

8番目の詩「あらわな秘密」は1814年12月10日の制作で、「ヴィースバーデン目次表」の82番目にあげられ、ここでは「不思議の舌〈mystische Zunge〉」となっている。この題は、ハマー=プルクシュタルが『ハーフィズ詩集』の前書きの部分で「彼は普段『不思議の舌』とまた『神秘の翻訳者』と呼ばれている」[5]と語っているのによる。

あらわな秘密

聖なるハーフィズよ、あなたのことを
彼らは不思議の舌と呼んだ
言葉の学者たちが
言葉の価値を知らなかったからだ

あなたはかれらのもとで神秘的と呼ばれる
彼らはあなたのもとにおいておかしなことを思い
彼らの不純な酒を
あなたの名へ注ぎ込むからなのだ

しかしあなたには神秘主義的なまじりけはない
彼らはあなたを理解していないのだ
あなたは信心深いというのではなく、浄福なのだ
それを彼らはあなたに認めようとしないのだ[6]

この詩は、ハーフィズと言葉の学者たちと

の関係を示そうとしたものである。民衆の信仰生活を導いてきた神秘主義者たちも、長年の間に次第に神への真の愛を忘れて形式主義に陥り、表面上は敬神、敬虔を装い、隠者の生活を送っているように見せかけてはいたが、実際は偽善、欺瞞の塊と化して堕落した日々を過ごすようになった。ハーフィズは、そのような腐敗、堕落した神秘主義者と一線を画した生き方を貫こうとしたのだった。ハーフィズはそのような神秘主義者には染まらない「神秘的には純粋な（神秘主義的なまじりけはない）」生き方を追求したのである。

9番目の詩「目くばせ」は、前の詩「あらわな秘密」と対をなすものと思われるものである。つまり、「あらわな秘密」で責められた「言葉の学者たち」の言い分にも配慮した気持が表明されている。制作は「あらわな秘密」とほぼ同じ頃のものである。「ヴィースバーデン目次表」では、「あらわな秘密」の後の83番目に挙げられ「取り消し」と題された。

目くばせ

しかし私が非難する彼らは正しいのだ
言葉は単純ではないということ
それはわかりきったことであるのに違いないのだから
言葉は扇なのだ、その骨の間からは
一対の美しい目が覗き見している
扇は愛らしいヴェールに過ぎない
それは私から顔は覆うが
少女を隠してしまうことはない
なぜなら彼女が持っている最も美しいもの
その目が私の目に光りかけてくるから[7]

日本では古来言葉には霊的な力が宿っていると考えられてきた。また、「行間を読む」という表現がある。「言葉の扇の骨の間から美しい目が覗き見している」というのは、そのようなことを意味しているのであろう。ペルシア文学の中にもそのような表現が見られる、例えば、ハンマー訳の『ハーフィズ詩集』で、「私は君たちに対して言葉をヴェールの中に覆う」[8]、サーディーの『果樹園』で、「あらゆる文字のもとには表現が隠されている、美しい絵が覆いの下に、月が雲の上に隠されているように。」[9] とある。「言葉は単純ではない」のだ。この詩では詩人の言葉の多義性ということに触れられている。

10番目の「ハーフィズによせて」で「ハイフィズの巻」は終わる。この詩は1818年9月11日にカールスバートで制作されたもので、1814年の『西東詩集』の初版の「ハーフィズの巻」の印刷の時までには間にあわず、「注と論考」の「将来のディーヴァーン」の「ハイフィズの巻」について記述している部分に追加されて発表された。

この詩全体を貫くものは「憧れ」である。憧れは第1節では卑しい者から王侯まですべての人間を強い絆で結び付け、第2節では運命のように人を高めもすれば破滅させもする。第3節では憧れは詩人を恋人のもとへ連れてゆき、ここでは恋人は「しずしずと歩く糸杉」という比喩によって示される。

第1節から第3節

ハーフィズによせて

すべての人が何を望むのかをあなたはすでに知っており

それをよく心得ていました
なぜなら憧れは卑しい者から王侯まで
われらすべてを強い絆で結びますから

憧れはつらいもの、かと思えば快いもの
それに抗う者がいたでしょうか
ある者は破滅し
ある者は向こう見ずになりはしても

師よ、お許しください、あなたも知る通り
しずしずと歩く糸杉が
目を引きつけるとき
私はたびたび僭越になってしまうのです[10]

ペルシア文学では糸杉はその風に揺れ動く様が愛する女性の優美な歩く姿や容姿を示すとされている。ハーフィズの詩の中でも何度も恋人を示す糸杉が出てきている。例えば邦訳11番目の詩の中に、「われらの絲杉がしとやかな松の歩みで現われるまで」[11]、54番目の詩の中に、「絲杉の如きそなたの姿は心を奪う」[12] など。

また、ディーツも『カーブースの書』の中で「糸杉」について注記して、「両性のすらりとした容姿は東洋の詩では常に糸杉に比べられる」[13] としている。糸杉はその枝を地面に向けて下げるということはなく、すべての枝を空に向けていて、他の木のように多くの小枝に広がるということがなく、幹を中心に円錐形を形作る一つのまとまった姿を示し、そのことが官能的な欲求から純粋であり、世俗的なものへの断念を示していて、その意味で自由を象徴していると受け止められている。

第4節から第6節

その足は細い根のように忍び歩き
地面と睦み合い
その会釈はかるい雲のように
その息は東風の愛撫のようにとけてゆきます

これらすべてが予感に満ちて私たちに迫ってきます
巻き毛が巻き毛に絡みつき
褐色のふくよかさを保ちながら膨れ上がり
それから風にさらさらと揺らぐとき

いまや額がはっきり現われ
それであなたの心が滑らかにされます
あなたは楽しく真実の歌を聞き
その中に心の安らぎを見出します[14]

第3節で恋人の歩く姿を糸杉によって示すことによって、第4節ではそれとの関連で「地面 (Boden)」、「雲 (Gewölk)」、「東風 (Ost-Gekos)」などが愛撫の対象として取り上げられてくる。そして第5節では、更に、恋人の巻き毛をも連想させてくる。第6節ではふたたびハーフィズについて語られ、彼に向けられた恋人の額は詩人の高鳴る心を和らげ、彼女の歌が詩人の魂をとらえて導く。なお、ここで「いまや額がはっきりあらわれ/それであなたの心が滑らかにされます (Nun öffnet sich die Stirne klar/ Dein Herz damit zu glättern,)」という表現はハマー=プルクシュタル訳の〈Da deiner Liebe Stein/ Des Herzens Formen glättet (あなたの愛の石が/心の形を滑らかにするので)〉[15] を踏襲しているとみることが出来る。

第7節から第11節

その際唇が
とても愛らしく動くと
それはたちまちあなたを解放しますが
あなたの心を縛り付けてしまいます

息はもはや戻ってこようとはせず
魂は魂へと逃れ行き
香りが至福によって立ち込め
目に見えない雲のようにたなびきます

しかし激しく燃えてくると
あなたは杯に手をのばし
酌とりは走り行き、また来ます
ひとたび、また、ふたたびと

酌とりの目は輝き、心は弾みます
酒が精神を高揚させたときのあなたの言葉を
最も高められた意味で聴こうと
あなたの教えを待ち望みます

酌とりにはさまざまな世界の空間が開かれ
心の中に救いと秩序が生まれ
胸がふくらみうぶ毛は濃くなり
酌とりの少年は青年となりました[16]

第7節で詩人は恋人の唇に目を向けてその魅力に捉えられ、第8節では恋人の息と共に吸い込んだ息を自分の中に保ちつづけたいと思う。第9節で激しく心が燃える詩人は杯に手を伸ばすが、そこで酌とりの少年が登場してくる。第10節で酌とりの少年による詩人の教えに対する熱望が語られ、酒の力によってハーフィズの舌は滑らかになる。第11節では、詩人は、彼がさまざまな世界を開いてやり、心の内部に幸福と秩序を与えてやった酌とりの少年の美しさと精神的感受性に注目する。

第12節から第14節

そして心と世界が含むどんな秘密も
明らかになると
あなたは、考える人には誠実に心優しく
意味が開かれるよう示唆を与えます

また王者の宝が
玉座から失われないよう
あなたは王によき言葉を与え
大臣にもそうなさいます

これらすべてを知り、あなたは今日歌います
あすもまた同様に歌うでしょう
そのようにあなたの教えが私たちをやさしく
人生の厳しい道、穏和な道を通して導いてくれます[17]

第12節では、詩人は思慮ある人も、その人の心の領域を広めるために、会話の中に引き入れる。そして、第13節では時の権力者とも心を響き合わせる。ハーフィズの生きた時代、シーラーズをめぐる政治情勢は必ずしも平穏ではなかった。そのような中で彼は、青年期にはその地の支配者であったアブー・イスハークに仕え保護を受ける。アブー・イスハーク自身文芸の良き理解者であったし、また、アブー・イスハーンの宰相カワーム・アル・ディーン・ハサンも王と共にハーフィズを保護したので、ハーフィズはこの王のも

とでその才能を充分に発揮することができ、充実した生活を送ることができた。しかし、アブー・イスハークに代ってシーラーズを支配したムバーリズ・アル・ディーン・ムハンマドは厳しい禁欲政策を取ったため、この王の支配した時期はハーフィズにとっては耐え難い時期であった。ムバーリズに代ったシーラーズの支配者シャー・シュジャーは、アブー・イスハークのように自らも詩作を行う程で学者や詩人を保護したため、ハーフィズはまた宮廷に出仕するようになった。

そのような中でハーフィズは王や大臣に「よき言葉」を与えた。

最後の節でもう一度ハーフィズを讃美しながら師と仰ぎつつこの詩を閉じている。

「注と論考」の「ハーフィズ」の項をゲーテは次のように述べて閉じている。

「ハーフィズの詩作について、われわれはごくわずかなことだけを語るに止める。なぜなら、人はハーフィズの作品を味わい、それに共鳴すべきものだから。彼の作品からは湧き出て止まない、節度ある生気が流れ出る。窮屈さに満足しつつ、楽しく賢明に世間の豊かさの中から自らの分け前を取り、神の神秘性には遠くから目を注ぎ、しかも宗教的行事や官能的快楽はどちらも拒む。そもそもこのような詩風は、それが何を促進し何を教えるように見えようとも、どうしても懐疑的な柔軟性を持ちつづけなければならないのだから。」[17]

また、「注と論考」の「将来のディーヴァーン」の項の「ハーフィズの巻」では次のように語られている。

「アラビア語やそれと近い言語を使用しているすべての人々はすでに詩人として生まれ、詩人として教育されているとすれば、そのような民族のもとにあっては優れた人物が無数現われるということが考えられる。けれどもそのような民族が500年の間にわずか7人の詩人だけしか第一級の資格を認めていないとすれば、われわれはそのような判定を畏敬の念を持って受け入れなければならないが、同時に、そのような選択がそもそも何に基づくのかを吟味することが許されても良いであろう。

この課題をできるかぎり解決することは将来のディーヴァーンに残されているといえよう。というのはハーフィズについて語るためだけでも、彼を知れば知るほど彼に対する驚嘆と愛着の念が増大して行くからである。極めて恵まれた素質、非常な教養、のびのびとした器用さ、それらは、難しいもの、厄介なもの、不快なものを折にふれ挟み込むことがあっても、人々が喜んで気楽に快適に聞けるものを人々に歌ってやりさえすれば人々の気に入るものだという確信が感じ取られる。もしも識者が次にのせた詩にハーフィズの姿をいくらかでも見ようとしてくれれば、この試みは西洋の人間である私に取っては格別の喜びである。」[18]

この記述の後に1819年に出版された初版本ではここで取り上げた「ハーフィズによせて」が掲載されている。

更に、1816年の『教養階級のための朝刊紙』の中での「ハーフィズの巻」に関する記述では以下のようになっている。

「「ハーフィズの巻」はこの非凡な人物の性格描写、評価、讃美のために捧げられている。同時に、激しく惹きつけられながら、張り合っても手の届かない存在であるペルシア

の詩人に対してドイツ人である作者が感じている関係についても語られる。」[19]

このような記述にも見られるように、「ハーフィズの巻」はゲーテのハーフィズへの畏敬の念と愛着の気持の表現に満ちたものであるということができる。

注

1）Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens, Münchner Ausgabe, hrsg. von Karl Richter（以下M.A.とする）. Bd.11.1. 2. S.26.
2）Mohammed Schemsed-din Hafis, Der Diwan, Aus dem Persischen zum ersenmal ganz übersetzt von Joseph von Hammer-Purgstall, 1973, Georg Olms Verlag, Hildesheim・New York,（以下Hafis, Diwanとする）Bd.I. S.IIf.
3）M.A. Bd.11.1. 2. S.93f.
4）M.A. Bd.11.1. 1. S.137ff.
全部で74行あるもののうち12行だけあげた。
5）Hafis, Diwan, Bd.I. S.XIII.
6）M.A. Bd.11.1. 2. S.26f.
7）M.A. Bd.11.1. 2. S.27.
8）Hafis, Diwan, Bd.II. S.206.
9）Der Persianische Baum-Garten/ Mit außerlesenen Propffreisern vieler Geschichte/ Seltsamen Begebenheiten/ Lehr-reichen Historien und merckwürdigen Sprüchen bepflantzt: In Persianischer Sprache beschrieben Durch Schich Musladie Saadi von Schiras; Und Umb seiner Vortrefflichkeit willen aus der Persianischen in die Niederländische/ und aus derselben in die Hochdeutsche Sprache gebracht. S.83.
10）M.A. Bd.11.1. 2. S.27.
11）黒岩恒男訳『ハーフィズ詩集』東洋文庫299、11ページ。
12）同上、44ページ。
13）Buch des Kabus oder Lehren des persischen Königs Kjekjawus für seinen Sohn Ghilan Schach. Ein Werk für alle Zeitalter aus dem Türkisch-Persisch-Arabischen übersetzt und durch Abhandlungen und Anmerkungen erläutert von Heinrich Friedrich von Diez. Auf eigene Kosten. Berlin, in Commission der Nicolaischen Buchhandlung. 1811. S.267.
14）M.A. Bd.11.1. 2. S.27f.
15）Hafis, Diwan, Bd.II. S.130.
16）M.A. Bd.11.1. 2. S.28.
17）M.A. Bd.11.1. 2. S.28f
18）M.A. Bd.11.1. 2. S.164.
19）M.A. Bd.11.1. 2. S.202f.
20）Goethes Werke, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Hrsg. von Erich Trunz. Bd.2, S.268.